

むかし、みぞろが沼のほとりに、孫四郎という貧しいお百姓が住んでいました。

あるとき、村の人たちがおおぜいで、伊勢詣でに出かけることになりました。けれども、孫四郎は、伊勢まで行くお金がありません。毎日、みぞろが沼の岸の草をかりながら、

「おれも行きたいなあ」とぼやいていました。すると、ある日、沼の中から美しい女が出て来ていました。

「おまえがそうして毎日草をかってくれるので、ほんとうにありがたい。なにか礼をしたけれど、望みはないか」といいました。孫四郎は、

「おれは、伊勢詣でがしたいんだが、お金がなくて行けないんだ」といいました。女は、にっこりして、

「それはお安いことだ。わたしがお金をあげるから行っておいで。その代わりに、おまえにひとつ頼みがある」といいました。そして、「この手紙を富士のすそ野の沼に持って行ってくれないか。その沼に行ったなら、手をたたくと、沼の中からひとりの女が出てくる。それはわたしの妹だから、手紙をわたしておくれ」といって、お金と手紙をさし出しました。

孫四郎は、女からもらったお金を持って、村の人たちといっしょに伊勢詣でに出かけました。何日かの泊りを重ねて、ようやく富士のすそ野まで来ました。孫四郎は、こっそりみんなからはなれて、沼をたずねて行きました。その途中で、六部にいました。六部は、「その沼へ何しに行くんだ」とききました。孫四郎は、

「みぞろが沼にすむ女の人から、手紙をあずかって来たんだ」といって、その手紙を見せました。六部は、それを開いて読んでみました。そして、

「これはたいへんだ。こんなことが書いてあるぞ。『この男に年じゅう毎日沼のほとりの草をかりとられるので、すがたをかくすのに都合が悪くてかなわない。男を取って食いたいが、そうすれば、わたしが沼にすんでいることが人間たちに知られてしまう。よって、おまえの所に立ちよらせるから、すぐに食っておくれ』とありました。孫四郎がおどろいてると、六部は、

「よし、おれが手紙を書きかえてやろう」といって、すぐに、こう書きかえました。

『この男は、年じゅう毎日沼のほとりの草をかってくれてありがたい。なんとかそのお礼をしたい。おまえの黄金の馬がよろしかろうと思うので、男にやってくれ』

孫四郎は、その手紙を持って沼に行きました。手をたたくと、美しい女が出て来ました。女は、孫四郎のわたした手紙を読むと、

「あなたにあげたい物があるから、わたしの所にいらっしやい」といいました。孫四郎が、

「それはこまります。どうやって、この水の中に入れよう」というと、女は、

「わたしにおぶさって、ただ目をつぶってあげればいいのです」といいました。孫四郎は、

いわれたとおり、女の背中におぶさって目をつぶりました。

やがて、女が、

「もう目を開けてもいいですよ」といいました。目を開けると、目の覚めるような美しいお屋敷の、りっぱな座敷のまんなかにならわっていました。

三日ほどすると、孫四郎は、いつまでもこうしてはいられないと思って、帰ることにしました。すると、女は、別れぎわに一頭の馬をくれて、

「この馬は、一日に米を一合食べさせると、黄金を一粒出します」といいました。孫四郎が馬にまたがると、あつという間に、馬は伊勢に着きました。そこで、神宮にお参りして、また馬にまたがると、たちまち故郷の村に帰り着きました。いっしょに伊勢詣でに出かけた村の人たちも、ちょうど村の入り口まで帰って来たところでした。

孫四郎は、馬をおくの部屋に入れて、米を一合、食べさせてみました。すると、ほんとうに、黄金を一粒、おしりから出しました。こうして、みるみるうちに、孫四郎は大金持ちになりました。

それを見て、孫四郎の弟が、ふしぎに思ってやって来ました。孫四郎は留守でした。そこでおくの部屋に行ってみると、りっぱな馬がいて、おしりから、黄金を一粒出しているところでした。弟は、試しに、側に置いてあったお米を一合、馬に食べさせてみました。すると、馬は、また黄金を一粒、ぼろりと出しました。

「これだ、これだ」

弟は、小おどりしながら、大急ぎで一斗の米を持って来て、馬に食べさせました。そのとたん、馬は、ひと声高くないなにかと思うと、空高く飛んで行ってしまいました。

馬は、新潟と秋田の国境の山にくつついて、駒ヶ岳という山になったということです。

原話：『江刺郡昔話』佐々木喜善／郷土研究社

再話：村上郁